

# 金融市場動向

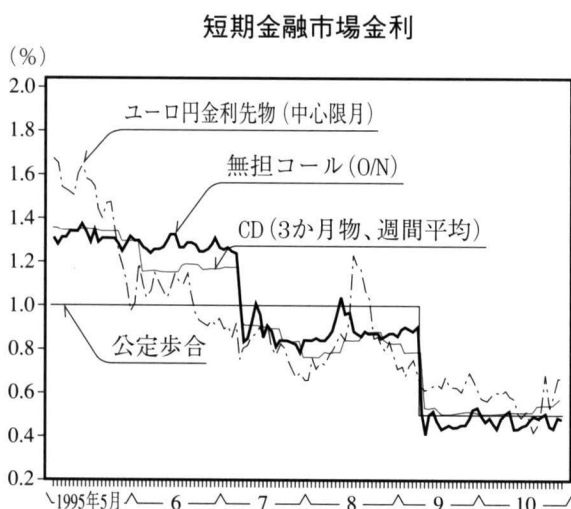
— 平成7年10月 —

(平成7年11月15日)

## 1. 短期金融市場

10月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、概ね0.5%を下回る水準で推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、月後半まではほぼ横這いで推移したが、月末にかけてやや上昇し、結局0.5%を上回る水準で越月した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、中旬にかけてやや弱含んだが、下旬に上昇した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、41兆2,735億円と前月（41兆2,160億円）に比べ増加した。



## 2. 資本市場

10月の長期国債利回り（174回債）は、月中

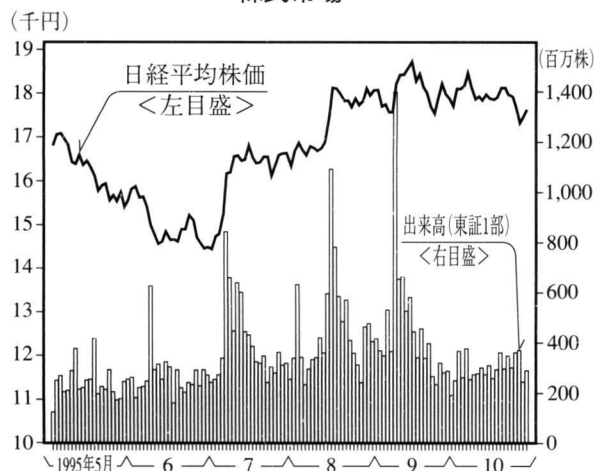
を通じて緩やかな上昇基調を辿り、結局2.800%で越月した（前月末2.665%、国債先物中心限月利回りは3.186%＜前月末3.206%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）は前月を上回り、先物は前月を下回った。

既発債市場利回り  
— 国債市場 —



株式市況（日経平均株価）は、月後半までは18,000円前後で推移していたが、月末にかけて銀行株の軟調もあって若干軟化し、17,654円と前月末（17,913円）を下回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、2.99億株（速報）と前月（4.64億株）を大きく下回った。

### 株式市場

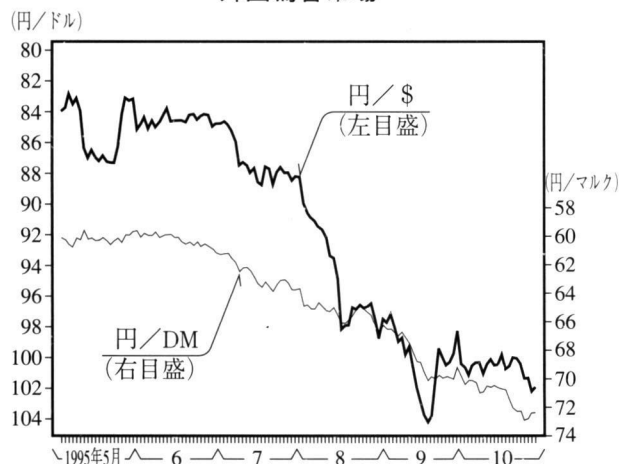


10月の国内公募普通社債は、長期金利に対する底打ち感の拡がり等から月中4,002億円と、既往ピークを更新した先月(6,310億円)に比べればペースダウンしたが、引き続き高水準の発行となった。一方、国内エクイティ市場での発行(10月払い込み分、増資を除く)は、引き続き低水準の発行となった(9月100億円→10月680億円)。

### 3. 外国為替市場

10月の円の対米ドル直物相場(東京市場)は、協調介入に対する警戒感や本邦投資家の根強い

#### 外国為替市場



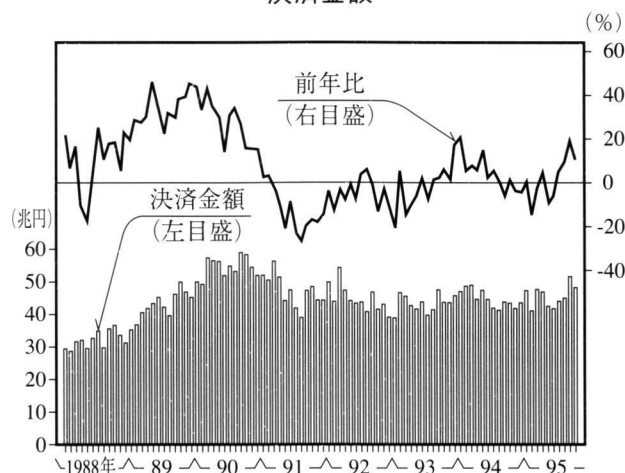
外債投資等から弱含みで推移し、月初の100円台から月末には102円台まで下落、101.90円(17時時点)で越月した(前月末98.18円)。円の対独マルク直物相場(東京市場)は、欧州通貨内でのマルク買いが進む中、月中を通じて下落し、結局72.26円(17時時点)で越月した(前月末69.27円)。

この間、東京外国為替市場の出来高(円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均)は222.6億ドルと、前月(271.2億ドル)を下回った。

### 4. 決 済

10月の資金決済の金額(1営業日平均)をみると、手形交換高(東京)は前年同月を大幅に下回った(前年比△35.8%)が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った(同+14.1%)。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った(前年比+25.6%)。また、国債の決済金額(1営業日平均)については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った(移転登録:前年比+49.9%、振込口座振替:同+23.9%)。

#### 決済金額



(注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

## 5. 資金需給、金融調節

10月の資金需給をみると、銀行券要因は3,733億円の不足（前年同月1,353億円の余剰）となり、財政等要因も8,841億円の不足（同1,697億円の不足）となったことから、全体では1兆2,574億円の不足（同344億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は手形買い入れ等により資金を供給した。

11月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は月中受払同額程度（前年同月796億円の余剰）となる見通しであり、財政等要因は、受入面で源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受け入れが見込まれるものの、支払面で地方交付税交付金や国債償還等の支払いが嵩むこと<sup>かさ</sup>から、4兆9,200億円程度の余剰（同4兆4,285億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では、4兆9,200億円程度の資金余剰（前年同月4兆5,081億円の余剰）となるものと予想される。

## 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

9月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+2.8%（速報）と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.8%（速報）と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。

10月の銀行券平残前年比は+6.8%と前月（+4.8%）に比べ上昇した。

10月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.7%と前月比伸び率が低下した。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+1.8%と、前月に比べ0.2%ポイント上昇した（6か月連続の前年比プラス）。

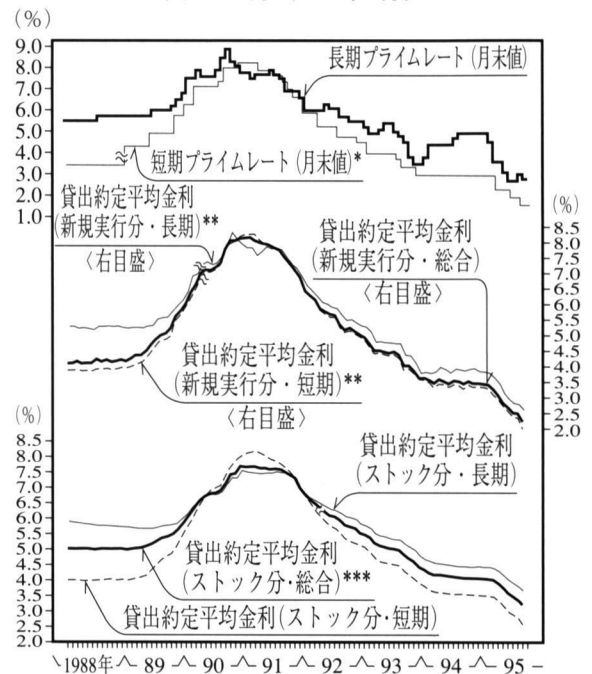
## 7. 貸出・預金金利

9月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期が8か月連続、長期が10か月連続で低下した（短期：前月比△0.361%、長期：同△0.188%）ため、総合でも11か月連続で低下し（同△0.308%、8月2.520%→9月2.212%）、既往ボトムを更新した。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに低下し（短期：前月比△0.215%、長期：同△0.132%、当座貸越：同△0.271%）、総合では27か月連続で既往ボトムを更新した（総合：8月3.353%→9月3.171%）。

この間、9月の定期預金金利（自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は、前月に比べ低下した（8月0.744%→9月0.555%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) \* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

\*\* 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)